

令和三年度

渋谷教育学園渋谷中学校 入学試験問題

国語

※ 解答は、必ず解答用紙の指定されたところに記入しなさい。

※ ○○字で、または○○字以内で答えなさい、という問題は、「。」「や」「、」「かつこ」なども一字と数えます。

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

【美緒は両親に無断で家を飛び出し、岩手で織物の工房を主宰している祖父の元に身を寄せている。両親は美緒を連れ戻すべく岩手を訪れるが、話し合いの場で自分の考えをうまく話せない美緒に対し、母は感情的になってしまい、美緒にひどい言葉をぶつけてしまう。】

泣けばすむと思っている。いつも女を武器にして、父や祖父には甘える。そういうところがきらい。

母に言われた言葉を思い出すと、頭がぼんやりする。

盛岡駅で両親を見送ったあと、祖父の家の二階に閉じこもり、美緒はベッドの上で身体を丸める。

目を閉じると、裕子が糸を掛けていた機が心に浮かんた。

昨夜は食事のあと、アトリエに来ないかと裕子に誘われた。

裕子はショールームの近くにあるアパートに、個人的な作品を作るための機や資料を置いていた。そこは山崎工藝舎が社員寮に使っていた建物で、駐車場をはさんで向かいに建つ古い木造アパートも昔は寮だったのだという。

その木造アパートの二階に太一は住んでおり、せつかく家を出たのに、実家にいた頃と変わらず、母にこき使われていると笑っていた。

裕子がそのアトリエで織っていたのは、羊本来の毛の色を活かした※シヨールだった。羊毛は白だけではなく、羊の種類や育つ場所によって、灰色や茶色の毛もあるそうだ。

今、織っているのは明るい灰色で、銀灰色と呼ばれる色だ。

濁りのないその色に「※おどる十二人のおひめさま」の絵本を見た、三つの森のうちの「銀の森」を思い出した。

裕子が少し布を織っていくと言ったので、隣に座ってその動作を見つめた。

足元のペダルを踏むと、ゆるみなく張られた縦糸が上下に分かれる。その間に横糸用の糸が巻かれた杼を、左から右へ裕子がすべらせていく。

そうして掛け渡された横糸を、布の縁が曲がらぬように注意して、箴でそつと手前に打ち込む。それが終わると再びペダルを踏んで、今度は右から左へ杼を渡し、箴で打ち込む。

繊細な羊毛の糸を扱^{あつか}う作業はすべて慎重^{しんちょう}で、箒^{はき}を打ち込む音も静かだ。

規則正しく繰^くり返される機の響^{ひび}きに、気が付くと眠^{ねむ}ってしまつた。

翌朝、目覚めると、裕子の機に朝日が当たっていた。

機が織り手待っているようだ。それを見たとき、自分も早く大きなものを織りたいと思つた。

羊毛の仕事は不思議だ。布づくりのことを考えている間は、昨夜の母の言葉も束^{つか}の間、頭から消えていた。

薄^{うす}く目を開け、美緒は赤いショールに手を伸^のばす。

昨夜の裕子の姿に祖母を思つた。

整然と並んだ縦糸に一筋ずつ横糸を渡し、やさしく箒で整える。顔も覚えていない祖母が慈^{いつく}しむようにして作ってくれたのが、このショールだ。

布に触^ふれた指先から、ほのかなぬくもりが伝わってくる。

好きだ、という思いがこみあげてきた。

羊毛の仕事が好きだ。

それなのに母に何も言えなかつた。工房や見習いの仕事を悪く言われても、黙^{だま}ってうつむいていただけだ。職人になる覚悟^{かくご}はあるのかと母は聞いた。

覚悟……と考えながら、美緒はショールを頭からかぶる。

好きだけれど、そこまではまだ心が決まらない。

開け放した窓から風が入ってきた。日中は①アツくても、日が沈^{しず}むとこの家は涼^{すず}しい。

肌寒^{はだ}さを感じて、美緒は立ち上がった。窓を閉めにいくと、外が明るい。

月の光が木立^{こだち}に落ち、森が白く輝^{かがや}いている。

ああ、と声が漏^もれた。

昨夜は「銀の森」の色を裕子の機で見た。今は目の前に「ダイヤモンドの森」の光がある。

月明かりのなかで、岩手山のシルエットがうつすらと見えた。その光景に「※水仙月の四日」の絵が心に浮かんだ。
赤い毛布をかぶり、吹雪のなかで遭難した子ども。

その子の命を取れと命じられた雪童子は、わざとひどく突き倒し、赤い毛布でその子をくるむと、自分の雪で隠して守ってやる。
部屋の前につけ、鏡の前に美緒は立つ。

② 赤いシヨールを頭に深くかぶった自分が映った。

たつぷりとした布の奥からのぞく目と、小さな身体。見るからに自信がなさそうな子どもを守るようにして、シヨールは鮮烈な色を放っている。
頭からシヨールを外し、両肩に掛けてみた。右から下がった布を左肩へ折り上げてみる。

艶やかな赤い布が身に添い、優雅なひだが首のまわりを縁取った。

見たことのない自分の姿に驚き、美緒は一步前に出る。

シヨールを肩にまとった自分は堂々としていた。背筋を伸ばすと顔が晴れやかになり、そんな自分の変化に力が湧いてくる。守られるのではなく、背中を押されているみたいだ。

これが色の力。いや、色と布の力だ。

布の織り目に美緒は目を凝らす。精緻な織りだ。布の端も驚くほど、まっすぐに整っている。

今ならわかる。ずっと身近にあったこの布が、どれほど高い技術で作られていたか。

赤がいい。強くそう思った。

赤だ。

こみあげる思いに、美緒はさらに前に進んで鏡に触れる。

同じものを作ろうとしたら、どうなるだろう？ こんなに力がある布を作れるだろうか。

今すぐ、作り始めたい衝動に突き動かされ、部屋を出た。

廊下に異様な熱気がこもっている。階段の下から祖父の足音がした。

「おじいちゃん！ あとで部屋に行ってもいい？」

「今でもいいぞ。なんだ？」

「ショールの色、決めました。すぐに行くけど、ちょっと待ってて」

「どうした？」

「なんかね、廊下がすごく熱い」

魚が腐ったようなにおいがただよってきた。廊下を歩きながらあちこちを見て、台所のドアを開けた。その途端、猛烈な熱気が顔を打った。叫んだつもりが声にならず、身体が固まった。

「あつ、火……火」

コンロの鉄鍋から大きな炎が上がっていた。その炎は壁を這い、一気に天井に燃え移った。けたたましいベルの音が鳴り響いた。

カジデス、カジデス、と火災、ホウチ器の音がする。

「おじ、おじい……か、か、みず、み……」

流しに伏せてあったボウルを手取る。しかし炎の熱気が強くて、水道の蛇口に近づけない。ようやく蛇口をひねったとき、祖父の声がした。水はやめろ、危ない、美緒、下がれ！

駆け込んだきた祖父が、思い切り美緒を後ろへ突き飛ばした。その勢いに尻餅をつく。

祖父の背が目の前に立った。羽織っていた黒い着物を脱ぎ、祖父が炎へ向かっていく。

弾かれたように立ち上がり、消火器を取りに美緒は廊下へ飛び出す。両腕で抱えて台所に戻ると、祖父が咳き込みながら着物を鉄鍋に振り下ろしていた。しかし炎の勢いは強く、布に火が飛び移った。

「おじいちゃん、下がって！ 消火器！」

祖父の寝巻きの帯をつかみ、美緒は背後に引く。祖父が消火器に手を伸ばした。

「くれ！」

「おじいちゃんは下がって！」

安全ピンを外し、美緒は炎に消火剤を放つ。

薬剤の勢いは激しく、瞬時に鍋の炎が消えた。すかさず前に踏み込み、ホースのノズルを壁と天井に向ける。噴出する薬剤の泡に押されるよ

うにして、炎は消えた。

「消えた、消えたよ、おじいちゃん。すごいね、消火器」

焦げた天井を見上げた祖父が顔を手で覆い、床に膝をついた。

美緒、とかすれた声でした。

「さがりなさい、危ないから」

「大丈夫、もう大丈夫だよ」

消火器の重さがずしりと腕にかかる。しかし、なるべく軽やかに持ち、美緒は残りの薬剤を天井に吹き付ける。

「おじいちゃん、……もう大丈夫だと思うけど」

床にうずくまった祖父から、かすかな声が聞こえた。

「駄目だ……」

「^③何が駄目？」

祖父の声が聞き取れぬほど小さくなった。

「私はもう……駄目かもしれない」

天ぶら油を火にかけたまま、祖父は父からの電話に出た。話をしながら、一階の染め場に降り、通話のあとはそこで作業をしていたそうだ。鍋を火にかけていたというより、炊事をしようとしていたこと自体、忘れたのだと言っていた。

火事のことを裕子に連絡すると、すぐに太一が駆けつけてきた。遅れて裕子が来て、三人ですすだらけの天井と壁の応急処置をした。

天ぶら油の火災の場合は、水をかけると炎が飛び散り、大やけどをする可能性があるそうだ。もし水をかけていたらと思うと、震え上がった。ここ数年、祖父はもの忘れをするようになり、時折、生活に^④シショウをきたしていたそうだ。

まったく気付かなかったと言うと、美緒ちゃんにだけはきつと気付かれたくなかったのだと、裕子は寂し気に語った。

翌日の夜、部屋から出てこない祖父のもとに、ローストチキンのホットサンドを運んだ。

丁寧^{ていねい}に淹れた^ひコーヒ^いーと一緒に、祖父の書き物机にトレイを置く。

声をかけると、屏風の陰から祖父が出てきた。寝巻きになっている白い着物姿が仙人のようだ。

灰色の着物を羽織った祖父が書き物机に座り、何色のシヨールを作りたいのかとたずねた。

赤、と答えようとして、ためらう。昨夜の炎の色が目に残っている。

「また今度でいいよ。おじいちゃん」

「聞いておきたい」

食べ物に手を伸ばさず、祖父が静かに言った。

「決めたのだろう。何色だ。色に託す願いは何だ？」

祖父の前に立ち、美緒は声を張る。

「赤です」

祖父が目を伏せた。ひるむ気持ちを抑え、美緒は言葉を続ける。

「託す願いは『強くなりたい』」

「美緒は決して弱くはない」

「でも……」

好きなものを好きと言える強さが欲しい――。

大きく息を吸って姿勢を正し、美緒は祖父の目を見つめる。

「おじいちゃん、染めを教えてください。新しいシヨールはすべて、自分の手で作りたい」

「どうして染めもしたいんだ？」

「⁽⁴⁾見てみたい……今の自分が、どこまでやれるのか」

祖父が目を閉じた。

「お前のお祖母さんも昔、まったく同じことを言って、私のもとから去っていった」
わかった、と絞り出すような声で祖父が答えた。

「やってみなさい。ただし、[※]お前は決して絶望するな」

三日後の朝、祖父と一緒に美緒は染め場に入った。

薬剤の飛び散りに強いという真新しいエプロンを付け、美緒は祖父の隣に並ぶ。

祖父が隅に置かれた大釜に目をやった。曾祖父の時代に使われていたが、昔ほどの注文がない今は出番がない釜だ。

ゴム長靴を履き、祖父がコンクリートの土間に下りていった。

「私が染めの見習いを始めたとき、父が言った。だいたい千回染めると感覚がつかめてくると。その通りだった。千回とは、土曜も日曜も休まず朝晩染めて三年近く。週に五日なら四年、三日なら七年弱だ。染めに限らず、どの道も一人前になるには時間がかかる。美緒……」

染料の薬品が入った戸棚の前に祖父が歩いていった。

「お前が千回の染めを迎える日まで、私は一緒にいてやれない。だから今、全力で教える」

「はい……先生」

祖父が怪訝そうな顔で振り返った。

「ここにいるときは『先生』って呼びます」

そうか、と祖父が微笑んだが、すぐに表情を引き締めた。

「始めるぞ。色、音、匂い、熱、手の感覚、全部記憶に叩き込め。言葉だけじゃない。全身でつかみとるんだ」

(5) 汗取りの手ぬぐいを固く額に結び、美緒はうなずく。

遠い昔、祖父もこうして曾祖父から染めを教わったのだ。

木立の奥から蟬の声が響いてきた。

(伊吹有喜『雲を紡ぐ』より)

※裕子……親戚の女性。祖父が主宰する山崎工藝舎にはショールームがあり、その責任者をしている。本文に出てくる太一は裕子の息子。

※ショール……主に防寒用・装飾用に織られた肩掛け。

※おどる十二人のおひめさま……グリム童話。絵本には、ひめたちが通った三つの森(銀の森・金の森・ダイヤモンドの森)などの、美しい挿絵が描かれている。

※水仙月の四日……宮沢賢治による童話。

※お前は決して絶望するな……祖父のもとで職人として働いていた祖母は、織りに対する考え方の違いから、独立して工房を開いた。しかし、思うように売れず、経営が行き詰まってしまふのだが、祖母には誰にも相談できずに苦しんだ過去があり、そのことを念頭に置いた発言。

問一——線①④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。漢字は一画ずついいねいに書くこと。

問二——線①「羊毛の仕事は不思議だ」とありますが、美緒がこのように感じたのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 繊細な羊毛を慎重に織って布を作っていく行為は、自分の考えを否定されて悲しい気持ちになっていた美緒の興味を引き、母から受けたひどい仕打ちのすべてを一瞬にして記憶の中から消し去ったから。

イ 使用する人のことを思つて丁寧な布を織っていく行為は、母の厳しい言葉によつて動揺していた美緒の心を落ち着かせ、自分のために心を込めて布を織ってくれた祖母の存在を束の間だけでも思い出させたから。

ウ きれいな羊毛から糸をつむいで布を織っていく行為は、実の母に面と向かつて厳しいことを言われて深く傷ついていた美緒の想像力や意欲を刺激し、布づくりのことを考えている間だけは母との辛い記憶を忘れさせたから。

エ 美しい羊毛を規則正しく織って布を作っていく行為は、少しずつ布づくりに興味を抱き始めた美緒の想像力をかき立て、わずかの間ながらも絵本の中の世界のような幻想的な光景をつくり上げたから。

オ 心を込めて布を織っていく行為は、静かで穏やかな空気を作り出すことで母の言葉によつて傷ついていた美緒の心に安らぎを与え、そのうちに織り機が語りかけてくるような感覚すら与えるようになったから。

問三——線②「赤いシヨール」とありますが、美緒にとつてこの「赤いシヨール」はどのような存在ですか。五十一字以上六十字以内で説明しなさい。

問四

——線③「何が駄目？」とありますが、ここでの祖父と美緒の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 火事という突然の事態の中、祖父は焦ることなく落ち着いて行動し、美緒の協力も得て完全に火を消すことができた。その後、祖父は火事の原因が自分のもの忘れだったことに気づき、途方に暮れてしまっている。一方、火の勢いがおさまるのに従って冷静になってきた美緒は、祖父を不安にさせないように気丈に振る舞い、気落ちした祖父が発した言葉に対してもあえて理解できない振りをすることで明るい雰囲気を作ろうとしている。

イ 火事という突然の事態の中、祖父は率先して消火活動にあたろうとするものの、最終的には美緒の行動に助けられて鎮火することができた。その後、祖父は火事を起こしてしまった原因に思い至り、自身の衰えを痛感して絶望している。一方、火が消えるのに伴って少しずつ落ち着きを取り戻してきた美緒は、できるだけ祖父を心配させないように振る舞っていたが、祖父の「駄目だ」という言葉に対しては何のことか見当がつかないでいる。

ウ 火事という突然の事態の中、祖父は自分の手で火を消そうとしたが、結局は美緒の機転と行動力によって火を消すことができた。その後、祖父は焼けてしまった現場を目の当たりにし、元に戻すのは無理だと失意に暮れている。一方、火が消えるのに合わせて状況を理解しはじめた美緒は、意気消沈している祖父を気づかって普段通り接していたが、祖父が発した言葉に対しては実状に見合ったものなのか判断できないでいる。

エ 火事という突然の事態の中、祖父は即座に動くことができず、美緒の力を借りてようやく火を消すことができた。その後、祖父はずっと隠していた自分の病気が美緒に知られてしまったと分かり、ショックを受けている。一方、火が消えたのを見てようやく緊張がとけはじめた美緒は、火事の原因が祖父の病気であったことにうすうす感づきながらも、「駄目だ」という祖父の発言に対しては真音をはかりかねている。

オ 火事という突然の事態の中、祖父は美緒を守ろうとして主体的に火を消そうとしたが、最終的には頼もしく成長した美緒の手によって無事に火を消すことができた。その後、祖父は自身の老いに直面せざるをえず、気持ちが悪く沈んでしまっている。一方、夢中になって消火活動にあたっていた美緒は、火が消えてもなお祖父を気づかうほどの余裕はなく、祖父が発した「駄目だ」という言葉に対しても何のことか理解できないでいる。

問五 — 線(4)「見てみたい……今の自分が、どこまでやれるのか」とありますが、この場面の美緒の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が作るシヨールの色を決めたものの、祖父に伝えるタイミングが悪かったと考えて遠慮えんりょしてしまう。以前であれば相手の状況が気になつて言えずにいたかもしれないが、今は自分の考えをしっかりと持ち、相手に伝えられる強さを願ひ、自分の思いを最後まで貫つらぬき通したいと考えるようになっている。

イ 自分が作るシヨールの色を決めたものの、赤い色から前夜の火事を思い出して祖父に伝えることに消極的になってしまう。以前であれば先送りしていたかもしれないが、祖父が優しく促うながしてくれたおかげで今まで考えてきたことと向き合うことができ、今は新たなことへの挑戦ちゅうせんを通して弱い自分を乗り越えたいと考えるようになっている。

ウ 自分が作るシヨールの色を決めたものの、自分の発言が祖父に祖母との辛い出来事を思い出させるように思われて口にするのをためらってしまう。これまではその場の雰囲気ふんいきに流されることが多かったが、今は自分の思いに向き合い、好きなことは好きと伝える勇気が大切なのだと思えるようになっている。

エ 自分が作るシヨールの色を決めたものの、祖父を不快にさせるのではないかと考えて伝えるのを迷ってしまう。これまでは相手の反応はんのうが気になつて自分の思いを伝えられなかったが、祖父の優しさによつて勇気づけられ、今は困難を乗り越える強さを願ひ、自分の限界に挑戦してみたいと思えるようになっている。

オ 自分が作るシヨールの色を決めたものの、赤い色が祖父に火事を思い出させるのではないかと考えて言葉にするのを躊躇ちゅうちよしてしまう。以前であれば自分の考えを押し殺していたかもしれないが、今は臆おくしながらも弱い自分を乗り越え、思ったことを伝えられる強さを願ひ、自分の可能性を知りたいと思えるようになっている。

問六 — 線⑤「汗取りの手ぬぐいを固く額に結び、美緒はうなずく」とありますが、美緒がこのような行動を取ったのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 死がすぐそこにまで迫^{せま}ってきている祖父に、全力で技術を身につけようとしている姿を見せることで安心してもらい、同時に自身もまた一刻も早く一人前になろうと気を引き締めたから。

イ 祖父から学ぶべき技術はあまりに多く、通常ではとても長い時間がかかるもので、短時間でそのすべてを吸収するには、学ぶ側にも相應の気持ちがないと受け止めきれないと考えたから。

ウ 祖父が曾祖父から受け継いだ技術には長い歴史があり、そのことを強く自覚しつつ世代をこえて受け継がれるものに敬意をはらうことが、これまで大切に見守^{まも}ってきてくれた祖父への恩返しになると強く信じているから。

エ 祖父が職人でいられる時間が残り少なくなっている中、全力で教えようとしてくれる祖父に対して敬意をはらい、脈々と受け継がれてきた技術と時間に思いをはせながら、すべてを全身で学び取ろうと強く決意したから。

オ 祖父に残された時間はわずかであり、祖父と孫、師と弟子^{でし}という関係を明確に区別しなければ、全力で教えようとしてくれる祖父に対して失礼であり、同時に美緒自身も短時間でより多くのことを学ぼうと意気込んでいるから。

問七 次のア～オは、この文章を読んだ生徒たちの感想です。文章の解釈^{かいしやく}として明らかな間違いを含むものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 三人称の視点から描かれています。文章の語り手は美緒に近い位置で述べていると感じました。短文が繰り返されることで、物語がテンポよく進んでいくように感じました。また、美緒に近い位置で語っているので、美緒の考えが深まっていく様子も感じられました。

イ 絵本に描かれている美しい光景と美緒の目の前の風景が重なり、どこか幻想的な雰囲気を作り出していると感じました。それらを結びつけるのが羊毛の美しい色であり、その点から考えても羊毛の色は本文を読み解く重要なキーワードとも考えられます。

ウ この文章において「色」はとても大切で、何かしらの意味が色によって与えられているように思いました。シヨールの赤色はもちろんのこと、祖父の着物の色が黒から白へ変わったことも、祖父の状況を照らし合わせると何らかの意味があるように考えられます。

エ 人物の描かれ方が印象に残りました。まじめで正直そうな祖父、常に相手进行を思いやる優しさにあふれた美緒、あえて厳しい言葉を投げかけて美緒の本音を引き出そうとする両親など、登場人物同士の交流を通して家族の愛と絆^{きずな}が描かれているように感じました。

才 赤い布という共通点がある遭難した子どもと美緒の描かれ方が印象に残っています。絵本の世界と現実の美緒とを見比べると、両者に違いもあり、その違いから美緒が変化していることを読み取ることができます。美緒が成長していく姿を描いた小説ともいえると思います。

問八 本文には「色を決める」という話題が出てきます。本文より前の部分に置かれている次の[1]・[2]の文章を参考にしたとき、美緒にとって色を決めたことには、どのような意味があると考えられますか。最もふさわしいものをあとの選択肢せんたくしの中から一つ選び、記号で答えなさい。

[1]

糸の束を手にした祖父が棚を見上げた。

「ずっとあの布をそばに置いてくれたんだな。楽しいときも苦しいときも、あのショールが常にお前と共にあったのだと知って、私たちはうれしい。だが大きくなった今は、自分で選べばいい」

「選ぶ？ 何を選ぶの？」

「自分の色だ」

祖父の隣に並び、壁を埋め尽くすさまざまな色の糸を美緒は見上げる。ピンクもオレンジも緑も青も、ここにある色、すべてに目が惹きつけられてしまう。

「まずは『自分の色』をひとつ選んでみる。美緒が好きな色、美緒を表す色。託す願いは何だ？」

「考えたこともない……私の色？」

[2]

「おじいちゃんはどうしていつも……何も聞かないの？」

「聞いてほしいのか？ それなら聞かす」

「いいです、やっぱり。大丈夫」

「何が大丈夫なんだ？ 何に対して大丈夫と言っているんだ？」

思わぬ問いかけに、美緒は手にした羊毛を花占いのようにむしる。

「ただ、そう思っただけ。大丈夫、まだ大丈夫。口癖くちくせみたいなもの」

「本当に大丈夫なら、わざわざ言わないものだ。気に掛かっていることがあるんだろう」

ピンクの羊毛にふうつと息を吐く。毛は舞い上がり、ピンク色の雲がいくつも宙に浮かんだ。

心の奥から、自然に言葉が浮かんできた。

「おじいちゃん、私ね、笑いが顔にくつついているの。仮面みたいにペタツと張り付いている。楽しくなくても笑う。つらくても笑う。笑っちゃいけないときも無意識にへらへら笑ってる。頭、おかしいよね」

「そんなふうに言うものじゃない。いつからだ？」

目を閉じて力を抜き、美緒は羊毛に身をゆだねてみる。

気持ちが悪くなった。

「わかんない。でも小学生の頃から、かな。人の目が怖い。不機嫌ふきげんな人が怖い。だから嫌きらわれないように『オールウェイズ スマイル』。いつもニコニコしてた。そうしたら私には何を言っても大丈夫、怒おこらないって思われて、きつい冗談じやうたんを言われるようになって……」

選択肢

ア 相手の反応が怖くて、常に何も考えないようにしていた美緒が、周囲の人々の働きかけによつて自分自身について目を向けるようになり、少しずつ自分のことを考えられるようになったという意味を持つ。

イ 自分の感情を押し殺し、何事も笑って周りに合わせていた美緒が、家族と交流し、自分の好きなことについて考えることを通して、本当に好きなもので自然と笑えるようになったという意味を持つ。

ウ 人にどう思われるかが心配で、自分らしさを表に出すことが苦手だった美緒が、祖父と過ごす穏やかな時間、不思議な魅力に満ちた布に触れることを通して、自分の考えを前面に出して行動できるようになったという意味を持つ。

エ 人々との衝突を避け、自己防衛に徹てつしていた美緒が、ずっと身近にあったものの存在に気づき、勇気づけられ、傷つくことを恐れず主体的に振る舞えるようになったという意味を持つ。

オ 周囲の目を気にして、自分を表現することができなかった美緒が、自分自身と向き合い、自分がどうありたいかを自分で決めることができるようになったという意味を持つ。

(問題は次のページに続きます)

二

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

グローバル化とは、端的に言えば、「利益」や「幸福」や「自由」を求める人間の欲望の空間的な展開といつてよい。グローバル経済は、あたかも世界中のあちこちに金貨が埋まっております、うまくそれを掘りあてた者には多大の利益を与え、さらに人間の自由を世界中に拡張する巨大な舞台であるかのように思われた。国家というボーダーは「利益」と「自由」と「幸福」に対する制約だと宣伝されたのである。そして、「利益」「自由」「幸福」の追求こそが近代の価値であるとすれば、グローバルイズムとはまさしく近代化の必然の①キケツであった。

「利益」や「自由」や「幸福」へ向けられたあくなき欲望の空間的な延長がグローバルイズムであったとすれば、その時間的な延長は成長至上主義であり、進歩主義もしくは革新主義であった。

「革新」は、旧来の価値や制度の破壊をよしとし、伝統的で慣習的なものにはさしたる価値を求めない。過去は否定されるべき対象となり、過去の否定の上にしか未来は創造できないと考える。その基軸になるのが技術革新であった。技術革新とはただ新規な技術の発明というだけのことではない。それは、エネルギー②シゲンのあり方から、消費文化、生活様式、社会構造まで含めた社会的様式の総合的な革新である。かつて鉄道や自動車の技術革新は社会構造そのものを変え、テレビや通信もそうである。近いところではITや金融工学もそうであろう。技術の革新によって経済は無限に発展し、それは、個人の自由や幸福追求の機会を無限に拡張するものであった。ここに時間を通じた歴史の「進歩」を見ようとする信念は、※マルクスから※シュンペーター、さらには現代のアメリカ経済学者にいたるまで、ほぼ共有されていた。

このような、近代的価値の空間的な延長であるグローバルイズムと時間的な延長である進歩主義（革新主義）を合わせて、①「近代主義」と呼んでおこう。

とすれば、問題は、ただグローバル経済の不安定性や成長戦略の枯渇といったようなことではない。システムの機能不全ではなく、問題は、われわれの価値観にあるからだ。

なぜなら、いくらシステムの不完全性が指摘され、グローバル経済の矛盾が論じられようと、もともとの基底的なレベルにおいては、われわれは近代主義を希求してきたことは否定できないからである。もともとの基底的なレベルとは、いつその自由を、いつその利益を、いつその幸福を、結局はわれわれは求め続けてきた、ということにほかならない。誰もがその価値を正面から疑おうとはしなかったからである。

したがって、もしもグローバル経済がもはや先には進めないほどの矛盾を露呈^{ろてい}しつつあるのだとすれば、それは時間軸に^③トウシャした革新主義、成長主義の限界でもある。すなわちここでわれわれは、「近代主義」そのものの臨界点にまで達したとみておく必要がある。問題はグローバルな資本主義というシステムにあるというより、近代主義という価値そのものにあるということだ。「グローバルな資本主義」なるものも、実は近代主義を構成するひとつの価値なのである。

今日、グローバリズムのもたらす経済的不安定に対してふたつの対抗策^{たいこうさく}が論じられる。ひとつは「地域」の可能性という^②「ローカリズム」であり、もうひとつは戦略性をもった強い国家の必要という「ステイティズム」である。

この両者を私はとくに難じるつもりはないが、しかしそれだけでは不十分であろう。問題がもしも「近代主義」という価値のレベルにあるとすれば、事態ははるかに深刻だからである。「ローカリズム」は、あまりに「近代主義」という価値のもつ強力さを軽視^{けいし}する傾向にあり、「ステイティズム」は、それ自体が変形された近代主義だからである。しかも、ともすれば「ローカリズム」は「国」を軽視^{けいし}し（時には対立さえし）、一方「ステイティズム」は「地方」を無視する傾向がある。これではうまくゆかない。

近代の日本において「地方」を論じることがむずかしい。多くの場合、「地方」は封建的因習^{ぼつけんてき}や村落的集団主義の温床^{おんしゅう}とみなされ、その逆の場合には失われたノスタルジ^{ノスタルジ}の対象でしかなかった。いずれにせよ「都市化」「近代化」が当然の前提となっていたのである。

かつて農商務省の官僚^{かんりよう}として地方の農業政策にも携^{たずさ}わった柳田国男^{やなぎたくにお}は、近代化のなかで地方が疲弊^{ひへい}し棄却^{ききやく}されてゆくことを、無念な思いとともに、なかば致^{いた}し方^{かた}のないことだと考えていた。都市の提供する「利益」「自由」「幸福」はとくに若者を引きつける。消費文化^{きようぶんりく}の享楽^{きやうらく}に對抗^{たいこう}できるものはや地方にはない。近代とは必然的に^③「地方生活」を枯渇^{こくわつ}させるものであった。そのなかで地方が生き残るとすれば、地方そのものが「近代化」するほかないのである。

そのことを柳田は残念に思い、悔^{くや}しがったではあろうが、ことさら批判するわけではなかった。しかし、同時に柳田は、地方の民俗誌^{みんぞくし}を調査し、まだ残されていた地方の「記憶^{きおく}」を記録してゆくことになる。柳田にとつては、地方とは「利益」「自由」「幸福」とはまったく対極の価値によって維持^{いじ}される場所であった。そこでは人々の生が、田畑や森という自然とかけ合い、精神の過剰^{かじよう}な跳梁^{ちやうりやう}は山の神や先祖という「聖^{みよ}なるもの」によって抑制^{よせい}されていた。つまり、地方的生とは、人、神、先祖、自然がとけ合って成り立っていた。いいかえれば、世俗の生は、宗教的なもの、歴史的なもの、自然的なものによって組み立てられていたわけである。

地方とは、ただ農村共同体でもなければ封建的家父長の温床でもなく、また単なる農耕産業地帯というだけではない。それは、山の神や森の自然などと一体化した様々な表象体系に囲まれた生であつた。そして、それこそが実は「日本」であつたのだ。

そうだとすれば、世俗の生をそのすべてから断ち切ろうとした戦後、あるいはもう少し広くいつて近代日本が、地方を失つてゆくことは必然というほかない。しかもそれは、⁽⁴⁾「地方」という以上に、「日本」を失つてゆくこともある。

地方は基本的に⁽⁴⁾マズしい。そこにきらびやかなものは何もない。さびしく厳しい。このような場所における生を支えるには、共同で守るべき神や先祖や自然がなければならなかつたのであろう。そこに留まり、その場所に「住まう」ためには、神と先祖を求めるほかなかつた。しかし神と先祖を生活の軸にすることで、おそらくはもっと大切なものを手にしていた。それは、共同の生であり、自我の抑制であつた。自らの「利益」と「自由」と「幸福」を求めているのは、生活が成り立たないからである。そこから他者への配慮、和の精神、自然への感謝、先祖への思いがうまれてきた。それらは日本人の価値の基底を作り、生活の慣習に根をおろしてゆく。

近代主義の精神、すなわちグローバリズム的な脱場所化と、進歩主義・革新主義のもつ脱伝統化は、これらの「地方的な価値」とはまったく対立するものである。そして、今日のわれわれの根なし草的状况とは、近代主義にすっかり浸された結果というよりは、実際には、近代主義さえ全面的に受け入れることができない、というところに原因があると思われる。「地方的なもの」は、世俗的な生としては過去のものとなつたが、それがもたらした価値は、依然としてわれわれの精神の奥底に堆積されているように思われる。そして、もしそうだとすれば、それはむしろ、⁽⁵⁾われわれには幾分かの希望ともいえるだろう。「日本」がわれわれの精神の奥底にはまだ残つているということだからである。

ただし、それを自覚するには、今日、世界中で生じている近代主義の行き詰まりに対してもつと絶望する必要があるだろう。「日本」とは、ただそこにあるものではない。それは消えゆくものの自覚的な蘇生でしかないからである。

(佐伯啓思『「脱」戦後のすすめ』より)

※マルクス……幅広い分野で活躍した学者(二八一八〜一八八三)。

※シュンペーター……経済学者(二八八三〜一九五〇)。

問一——線①④のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は一画ずつていねいに書くこと。

問二——線①「『近代主義』」とありますが、筆者はそれをどのようなものだと考えていますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 国家というボーダーは人間の欲望の追求を前にしては無力であるという思想と、成長のためには過去から続くものの破壊もいとわずに新しい方向性を探るのがよいという思想とを合わせたもの。

イ 人間が求める利益は世界中のどこにでも存在しており気ままに個人がそれを求めることができるという思想と、過去から未来に至るまでの時間の流れを進歩と考えて経済が発展したとみなす思想とを合わせたもの。

ウ 利益を自由に追求できる快適な空間は世界中に無限に広がっているという思想と、歴史のうえで社会を変革させたような技術を経済の進歩とする思想とを合わせたもの。

エ 国や地域の制約なく個人が活動できる場を設けることに重きを置く思想と、これまで培われてきたものに対して成長する余地を見出し、技術革新を図ろうとする思想とを合わせたもの。

オ 物質的・精神的な豊かさを実現できる場を広げていこうとする思想と、成長することに価値を見出し従来のものをためらうことなく改変していこうとする思想とを合わせたもの。

問三——線(2)「ローカリズム」とありますが、このことに関する説明として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「地方」を優先させる「ローカリズム」は、われわれの根底にあり続けている、人間の欲望を追求できる空間を制約なく設けることに重きを置くグローバリズムと経済や技術の改善を重要視する進歩主義とを合わせた「近代主義」の存在を軽んじる傾向がある。また、「近代主義」は「地方」の存在を認めないため、「ローカリズム」と「近代主義」とは否定し合う関係にある。

イ 「地方」を優先させる「ローカリズム」は、われわれが根底で抱き続けてきた、人間の欲望を追求できる空間は無限に広がっているというグローバリズムと歴史の転換となった技術を経済の進歩だとする進歩主義とを合わせた「近代主義」の存在を甘く見る傾向がある。また、「近代主義」は「地方」の存在が理解できないため、「ローカリズム」と「近代主義」とは共存しえない関係にある。

ウ 「地方」を優先させる「ローカリズム」は、われわれが根底で求め続けてきた、人間の欲望はどこであつても満たすことができるというグローバリズムと過去から現在に至る時間の流れを進歩とみなす進歩主義とを合わせた「近代主義」の存在を黙認する傾向がある。また、「近代主義」は「地方」の存在に関わりがないため、「ローカリズム」と「近代主義」とは両立する関係にある。

エ 「地方」を優先させる「ローカリズム」は、われわれの根底に存在し続けてきた、人間の欲望が追求できる空間を拡張していくグローバリズムと経済や技術の成長に重きを置く進歩主義とを合わせた「近代主義」の存在を過小評価する傾向がある。また、「近代主義」は「地方」の存在を顧みないため、「ローカリズム」と「近代主義」とは相いれない関係にある。

オ 「地方」を優先させる「ローカリズム」は、われわれの根底に息づいている、人間は欲望の追求を前にしては無力だというグローバリズムと成長のためには旧来の価値や制度の破壊もいとわない進歩主義とを合わせた「近代主義」の存在を重んじる傾向がある。また、「近代主義」は「地方」の存在を無視するため、「ローカリズム」と「近代主義」とは不安定な関係にある。

問四——線(3)「地方生活」とありますが、それはどのような「生活」ですか。四十一字以上五十字以内で説明しなさい。

問五 — 線(4)「『地方』という以上に、『日本』を失つてゆくことでもある」とありますが、「『日本』」とはどのようなものですか。最もふ

さわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地方での人々の生活のなかから徐々に失われていった独自の生活様式のこと、日本が近代化をとげるうちに確立されていき、日本人の生活を支えていたもの。

イ 地方での人々の生活のなかから生まれた他者や自然への尊敬の念のこと、日本が近代化をとげるうちに忘れられていったものの、日本人を近代化へと導いたもの。

ウ 地方での人々の生活のなかで育まれた精神的な要素のことで、日本が近代化をとげるうちに捨て置かれていったものの、日本人の考え方の礎となるもの。

エ 地方での人々の生活に若者が魅力を感じないことへの諦観のこと、日本が近代化をとげるうちに注目されていった、日本人の価値観を左右するもの。

オ 地方での人々の生活における先祖や自然に対しての豊かな精神性のことで、日本が近代化をとげるうちに消滅してしまった、日本人の心の奥底に眠っていたもの。

問六 — 線(5)「われわれには幾分かの希望ともいえる」とありますが、どのようなことが「希望」といえるのですか。五十一字以上六十字以内で説明しなさい。

問七——線(6)「絶望する必要がある」とありますが、筆者がこのように考えるのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 近代主義の行き詰まりを直視することで、これまで顧みられることが不十分だった、日本人の精神の奥底にある地方的価値の新たな価値について検証することができるから。

イ 近代主義の限界に落胆^{らくたん}することで、近年は過去のものとして忘れ去られつつあった、日本人の精神の奥底にある地方的価値を顕在化^{けんざい}させることができるから。

ウ 近代主義の現状を悲観^{きかん}することで、過去に切り捨てられてきた、日本人の精神の奥底にある地方的価値をさらに一掃^{いそう}する重要性を感じるから。

エ 近代主義の理念を拒絶^{きんぜつ}することで、これまでは捨て置かれてきた、日本人の精神の奥底にある地方的生のもつ価値に気がつくことができるから。

オ 近代主義が築き上げた精神に失望^{しつぼう}することで、近年長らく不要とされてきた、日本人の精神の奥底に封じ込め^{ふうこめ}られている地方的生の存在を解放^{かいはつ}できるから。

問八 本文を読んで考えたことを生徒たちが話しています。本文をふまえた意見として、明らかな間違い^{まちが}を含むものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒Aーグローバル経済は「人間の自由を世界中に拡張する巨大な舞台」のようだ^{よう}だと本文にありました。今は世界中に色々なものが流通する世の中です。このような世の中だと、金融危機など、何か問題が起きるとそれも世界規模に広がってしまうように思います。

イ 生徒Bーなるほど。瞬^{またた}く間に一つのニュースが世界中に知れ渡^{わた}ることもあり、これは進歩主義に従って様々な技術が飛躍的に発達した^たことと関係があるように思います。技術の発達^{はつた}は、個人の自由や幸福追求のチャンスの増大にもつながる気がします。

ウ 生徒Cーわたしたちは、より豊かな生活を願うことが当たり前だと考えていました。食品でも洋服でもより良いものを求めて、それらがすぐ手に入る世の中となっているのは、近代主義的な考え方にのっとって発展してきた結果なのだと思います。

エ 生徒Dー近代化によって地方が廃^{すた}れていったという関係性が指摘^{しきさつ}されていました。地方に大型ショッピングモールが展開し、地元の商店

街の活気が失われていったという話と重なるように感じました。

オ 生徒E―「ステイティズム」は、それぞれの地域を重要視します。地域ごとの議会の権限を強化したり、その地域独特の方言や行事などを尊重して次世代へと継承^{けいしょう}していったりする考え方ですね。

（問題は以上です）

合計得点	※
------	---

問一
①
<
②
③
④

問二

[illegible]

問四	
----	--

問五

問六	
----	--

問七

問八	
----	--

二	
問一	①
しい	

問二

問三

[illegible]

問五

[illegible]

問七	
----	--

問八

✖

8

8

8

5